

きべりはむし

第16巻 第2号

目 次

大上宇一氏による西播磨の甲虫相	高橋 寿郎	29
マツシタチャイロコガネの兵庫県下での分布	高橋 寿郎	35
兵庫県産テントウムシ数題	高橋 寿郎	37
兵庫県産カミキリムシ2題	高橋 寿郎	40
宝塚大橋の甲虫(その2)	新家 勝	41
宝塚市安倉上池のトンボ(続報その1)	新家 勝	44
アオドウガネの食草についての報告(続報その3)	新家 勝	46
ヒメタイコウチの記録について	西 隆宏	47
芦屋市内でクロイワツクツクの声聞く	西 隆宏	47
オオシロカミキリの芦屋市における記録	西 隆宏	48
サツマゴキブリのオガ屑内発見例	森田 貞澄	49
カラスザンショウに吸蜜に訪れた蝶について	蜂谷 幸雄	50
イネネクイハムシ小野市山田町で採集	高橋 寿郎	51
神戸市内のムネアカセンチコガネ	高橋 寿郎	52
ナガツツハムシの記録	高橋 寿郎	54
県関係文献紹介		55
県内学会誌・同好会誌		56
会員異動		56

兵庫県昆虫同好会

1988年11月

大上宇一氏による 西播磨の甲虫相*

高橋 寿郎

日本の甲虫の研究が欧米人の来日により始まったことは良く知られている。そして大きく別けて Goschkevitch 夫妻の採集品をもとに研究をされた V. I. Motschulsky の研究（これらは北海道を中心に一部下田産のものもふくまれる）及び1864~1872年に長崎に在留し一旦帰国して再び1880年から1年8ヶ月滞在しその間主として長崎・兵庫・大阪及び関東から北日本に及んで採集調査をしそれを持ち帰り自身並びにヨーロッパの夫々専門家に研究を依頼多数の論文が発表された G. Lewis の業績が日本の甲虫の研究基礎となっていることは認められる。それ以外にも日本の甲虫を採集調査し甲虫に関する論文を発表された欧米人は何人かはいる。例えば Dr. Rein Johan, J. の採集なども兵庫での採集品が大変多くある。そう云ったことは日本での甲虫研究が始った時点から兵庫の甲虫の研究も始っているのであるが日本人による研究と云うことになると松村松年博士（明石生れ）がおられた北海道帝国大学が中心となり日本の北部の研究がその主力を占めていた（即ち北海道・千島・樺太などの研究が主体で本州でも関東地方・中部地方での調査はおこなわれつつあったようである）。

兵庫県でも兵庫・神戸はいち早く欧米人によって調べられたのであるが日本人による研究は神戸あたりではほとんどおこなわれていなかった。当時の神戸は港町であり漁港でもあった。文化的な見地からすればまだ未開の地と考えられる。兵庫県下では播磨地方などは近畿・山陽・瀬戸内・山陰の人々が行き交い、文化のつぼとなっていた。従って兵庫県下の甲虫相と云ったものを始めてとりあげたのは大上宇一氏による播磨産甲虫類という一連の研究報告であることは首肯できる。

当時日本の甲虫の研究が緒についたばかりの時期明治35年(1902)にいち早く大上宇一氏は西播磨の甲虫相をとりあげられ（蝶については明治33年に報文を発表しておられる）ているのであって之は大変な業績である。ただ西播磨の地と云うことになると可成りの範囲が広くその後全部をまとめた甲虫相の様なものは出ていないが部分的には宍粟郡下の音水・赤西をふくむ地域とか相生市の三湊山のものとかの報告は出ているが西播磨の中央部にあたる揖保郡を中心とした甲虫相はこの大上氏のもの以外ほとんど報告が見られない。その意味からすればこのあたりの甲虫相は現時点でも余り良くわかっていないと云えるのではないだろうか。

そこで今回はこの大上宇一氏の一連の報文をとりあげて播磨地方甲虫相の概略を眺めて見たいと考えた次第である。何分にも十分な文献が無い状況下で大上氏の研究は特に動物学雑誌に発表されたものは学名もついていないものが多く著者がつけた和名もあったりして現時点でよくわからないもの

*兵庫県甲虫相資料・212

が多くまして当時の標本を見られないので種の確定がかなり困難である。其処で昆虫世界に発表になられた方（こちらは参照文献もやや多く学名もほとんどつけられている）を今回はとりあげることにした。

大上宇一氏についての人となりとか業績のまとめなどは兵庫生物誌上にかなり詳しく出ているのでそれを参照して頂きたい（後出）。

今回此処にとりあげた大上宇一氏著の播磨産甲虫相については次の文献からで始めにそれ等を書いておきたい（蝶に関する一篇も加えてある）。

1900. 播磨蝶報. 動物学雑誌 12(139) : 187. (7科 45種) .

1901. 播磨産象虫科略報. 動物学雑誌 13(155) : 289-292 (マメゾウムシ科 2種. ゾウムシ科 30種) .

播磨産天牛科. 動物学雑誌 13(155) : 292-294 (28種)

播磨産金亀子科. 動物学雑誌 13(156) : 321-323 (28種)

播磨産金花虫科. 動物学雑誌 13(156) : 323-326 (35種)

播磨産步行虫科略報. 動物学雑誌 13(156) : 326-328 (28種)

播磨産天牛科追報. 動物学雑誌 13(156) : 329 (12種)

播磨産朽木虫科. 動物学雑誌 13(156) : 329-330 (ゴミムシダマシ科 13種)

1902. 播磨産甲虫報知 動物学雑誌 13(157) : 360-363 (オオキノコムシ科 10種. ガムシ科 12種. ミズスマシ科 2種. ゲンゴロウムシ科 5種) .

步行虫科追報 動物学雑誌 13(157) : 363-364 (3種)

播磨産甲虫類報知. 動物学雑誌 14(167) : 344-348 (いままでで215種になる。テントウムシ科 14種. ハムシ科 9種. カミキリムシ科 6種. キクイムシ科 4種. カミキリモドキ科 5種. ハナノミ科 2種. ツチハンミョウ科 2種. コガネムシ科 3種. これらを加えて264種報告されたことになる) .

1903. 播磨産甲虫類 動物学雑誌 15(171) : 20-25 (ケシキスイ科 5種. シデムシ科 3種. ハネカクシ科 8種. ガムシ科 2種. ゲンゴロウ科 5種. オサムシ科 16種. ハンミョウ科 3種. 以上計349種) .

1906. 播磨産甲虫類 昆虫世界 10(112) : 511-512 (ハンミョウ科 3種. オサムシ科 28種) .

1907. 播磨産甲虫類 (承前) 昆虫世界 11(115) : 110-112 (ゲンゴロウ科 13種. ミズスマシ科 2種. ガムシ科 9種. ハネカクシ科 7種. シデムシ科 4種. エンマムシ科 4種. ケシキスイ科 2種. オオキスイ科 2種. カッコウムシ科 2種. コクヌスト科 2種. カツオブシムシ科 2種. ヒョウホンムシ科 2種. クワガタムシ科 7種. 前回と計88種) .

播磨産甲虫類(承前). 昆虫世界 11(116):159-161(コガネムシ科 32種, タマムシ科 10種, コメツキムシ科 8種, ホタル科 7種, ゴミムシダマシ科 8種ここのまでの計153種).

播磨産甲虫類(承前)昆虫世界 11(117):199-202(クチキムシ科 3種, ハムシダマシ科 1種, カミキリムシ科 41種, ヒラタキクイムシ科 1種, シバソムシ科 1種, ツツキノコムシ科 1種, ケシキスイ科 1種, ゴミムシダマシ科 1種, ハナノミ科 1種, ツチハンショウ科 2種, カミキリモドキ科 4種, マメゾウムシ科 4種, ここのまでの計214種).

播磨産甲虫類(承前)昆虫世界 11(118):243-245.(ゴミムシダマシ科7種, ゾウムシ科24種, キクイムシ科 5種, ハムシ科 32種, テントウムシ科 17種, 以上299種).

以上が大上宇一氏が播磨地方の甲虫相として発表されたものであると考えられる(但し甲虫以外に次の様な報文も筆者の手元にある).

1902. 播磨の昆虫に就て, 昆虫世界 6(55):108-109. 1902. 播磨地方の寄生蜂類に就て, (1, 2), 昆虫世界 6(60):323-325. 6(61):373-375. 1903. 播磨産葉蜂科報告(1, 2), 動物学雑誌 15(174):114-122. 15(175):160-167.

始めに記した様に動物学雑誌に発表になられたものは参考書が無く一々学名を記入することが困難であり和名も松村博士の昆虫書に探りたる外深く他書を見ずとあり松村松年博士が1898年に出版した「日本昆虫学」を参考にした程度で和名など自分でつけたと述べている様にこの報文で種を正確に判断することは可成り困難である。その点昆虫世界に発表になった報文は松村氏の日本千虫図解及び日本昆虫学, 動物学雑誌, 昆虫世界等を参考にした上に1879年 G. Lewis が発表した“A Catalogue of Coleoptera from the Japan Archipelago(London)”を参考にしこのルイスのカタログ番号を今回の報文の各種につけさらに学名が記入されていることは相当に同定が出来ていることを示すものである。即ち恐らく同じ標本を基に発表されたと考えられる前回で349種記録されて今回の299種記録されていることは同定により可成り整理されたのではないかと考えられる。従って昆虫世界に発表になったもので検討するのがよりよいと思われるが残念なことに現在標本が残っていないのでこちらの記録でも同定に不安をおぼえるものが若干あったりしている。一々各種に就いての検討は大変なことなので今回は省略しているが現在の知見からすれば学名なども可成り変更になるものがあると考えられる(筆者はかつて大上氏のコガネムシだけを取り上げてそれを検討した報文を発表したことがある——“大上宇一氏記録の播磨産コガネムシ類について” MDK NEWS 25(2):17-21, 1973)。

大上宇一氏が播磨産甲虫類として発表になられたのは一応35科299種ということになり同じ西播磨

に属する相生市の三澁山で筆者が調べた甲虫類は(13回の調査結果)55科440種が記録出来ている(MDK NEWS Vol. 27, NO. 77, p. 2-6, 1977)。それからみると大上氏の記録は若干少ないかなアと云う気がしないでもない。植物相の豊富な音水・赤西地域になると甲虫の数はかなりふえる。一応現時点でこの実粟郡産で記録されている甲虫類は74科1,012種の多くを確認されている(かつて筆者は赤西・音水国有林の甲虫相の一部を発表したことがあるが——兵庫生物第7巻第1号, p. 39-41, 1975——事情があり完結していない。ここに示した数字は1987年度でまとめた新しいものである)。

この地域は特にカミキリムシ(193種), ハムシ(122種), ソウムシ(108種)と森林性のものが多くいるという特色が見られこの地域が植物相にも恵まれていることを示している。また可成り珍しい種を産する地でもある(実粟郡下の調査は筆者自身20数回実施しているしその他にも多くの記録を見ることが出来これらを総合しての数字である)。

揖保郡を中心とした大上氏の発表された報文はその意味からすればまだ充分ではない。また大きな欠点として単に種名の羅列に終り各種の産出状況とかデータが全く無いと云う点である。各種に就いての産策はともかくとして全体に眺めた場合余り特異なものが出てこない。このことは当時の同定出来る範囲での収録となっているためでもあろうと思うがまず普通に見られる種が多い様で甲虫相としての特色は余り見られない。若干記録されているものの内注意したいものについて説明して見る。

- クロカタビロオサムシ *Calosoma maximowiczi* (Morawitz) (オサムシ科) (学名は現在使用されているもので記してある。以下同じ)。

本種はこのあたりでは佐用郡の大嶽山にも産するし相生市の三澁山でも採集出来る。兵庫県全般から見れば川西市笹部あたりに多くいることは良く知られていたが現在の状況は変わっていると思われる。その他神戸市内でも得ているが可成り個体数の少ない種であり揖保郡あたりの産もそれ程多くなのかもしれない。

また大嶽山には分布の東限と考えられるチュウゴククロナガオサムシ *Carabus* (*Leptocarabus*) *kyushuensis nakatomii* Ishikawa を産するが揖保郡あたりにもいるかもしれない。

- ゲンゴロウ *Cybister japonicus* Sharp コガタノゲンゴロウ *C. tripunctatus orientalis* Gschwendtner (ゲンゴロウ科)

大形のゲンゴロウの仲間は最近急速にその姿を消しつつある様に思われる。自然環境の破壊もさることながら農薬の使用によって著しく影響を受けている様で兵庫県下でも全般にこの傾向にあるようだ。揖保郡下あたりの状況が良くわからないが同じ様な現象をあらわしているのかもしれない。

- ツヤハダクワガタ *Ceruchus lignarius* Lewis (クワガタムシ科)

揖保郡での記録はチビクワガタ *Figulus binodulus* Waterhouse と間違って同定されているのでは無いかと考えていたが最近本種は氷の山にはどうもいるらしいので或いはこのあたりにいないとも云えない様な気がする (きべりはむし Vol. 15, No. 2, P. 57-58, 1987).

尚動物学雑誌の報文の中にP. 299. オオクワガタ (Vol. 14, No. 169, P. 414, 1902) と云うのがある。学名が入っていないので真のオオクワガタかどうかよくわからない。このあたりにいるとすれば面白いのだが。

○ ツノコガネ *Liatongus phanaeoides* (Westwood) (コガネムシ科)

本種がこのあたりに分布しているとすれば大変喜ばしいがどうもこのあたりには分布していない種ではないかと考えられる。再検討の余地があるようである。

○ ヒゲコガネ *Polyhylla* (*Gynexophylla*) *laticollis* Lewis (コガネムシ科)

本種の県下の産地は可成り局地的の様である。東播磨に属する美囊川川原には多産するが西播磨での記録はほとんど無い。この種の産も再検討の要ありそうである。

○ コカブトムシ *Eophileurus chinensis* (Faldermann) (コガネムシ科)

本種は県下に割合広く産するようであるが個体数が多い種ではない。

○ トラハナムグリ *Trichius Japonicus* Janson (コガネムシ科)

本種の県下での産は可成り局地的の様でいわゆる稀種に近いと考えられる。揖保郡下では筆者自身も鷺籠山で1♂を採集した (27-V-1960)経験がある。

○ マクガタテントウ *Coccinula crotchii* (Lewis) (テントウムシ科)

県下での産地は可成り少ない。やはり注目されてもよいかと思う。

○ カメノコテントウ *Aiolacaria hexaspilota* (Hope) (テントウムシ科)

県下では広く分布している。多産地と云うのは余り知られていない。6月頃クルミハムシを食すると記録されている(成虫・幼虫ともにクルミハムシの幼虫を捕食する)。

○ ヒゲナガゴマフカミキリ *Palimua liturata* (Bates) (カミキリムシ科)

県下では山岳地域に割合いる種である。南の方で多くの個体を見ることは少ない様に思われる。

○ ハンノキカミキリ *Cagosima sanguinolenta* Thomson (カミキリムシ科)

ハンノキの害虫である。最近めっきり見ることの少なくなったカミキリムシである。(1988年5月26日竜野市神岡町で *lex.* 採集出来た)。

○ アサカミキリ *Thyestilla gebleri* (Faldermann) (カミキリムシ科)

アサ(大麻)の害虫である。アサの栽培が禁止されてからはほとんど見ることの出来なくなったカミキリムシである。

播磨地方の甲虫相と云うものが部分的ではあるが今から90年近くも前に調べられているということは驚くべきであると共にその当時の文献の無い状況下でこれだけの調査をされた大上宇一氏の努力に敬服するのみである。そして現在でも尚この地域の甲虫相をしらべる人もなければまとまった報文も現れていないことが残念である。

最後になるが大上宇一氏から若干後になるが同じ西播磨のお隣に当たる佐用郡の昆虫相をまとめた井口宗平氏の貴重な報文がある。ただこちらの方は膜翅, 双翅, 甲虫の三目を除く報告になっているのが残念である。ただこの時期共に兵庫県西の端の地域でのファウナの報告があらわれていることにただただ敬意を表すのみである。一応井口宗平氏のファウナに関する報文で筆者の手許にある文献名を掲げておく。

1908. 兵庫県佐用郡産昆虫目録. 昆虫世界 12(127): 116-118. 12(128): 158-160. 12(129): 201-202. 12(130): 251-252. 12(131): 291-293. 12(132): 335-337. 12(133): 377-379.

1908. 有物目の四新種に就て. 昆虫世界 12(136) : 510-512. 1909.

兵庫県佐用郡産半翅類追加. 昆虫世界 13(141) : 205-207. 1950. 佐用郡産蝶類及び天蛾類の採集葉. 兵庫生物(4) : 49-51.

また井口宗平氏については室井 緯博士著 播磨の昆虫と井口宗平先生(兵庫県博物学会誌 No. 17 : 27-29, 1939) と云うのがある。

さらに大上宇一氏に関するものでは次の様な報文がある. 建部恵潤. 故大上宇一先生寄稿論文目録(1, 2). 兵庫生物 No. 3 : 30-32, 1949. 1(5) : 98-100, 1951. 三木 茂, 井口宗平, 吉野善介. 故大上宇一氏追憶記集. 兵庫生物 No. 4 : 54-56, 1950. 大上宇一資料展報告. 兵庫生物 9(4) : 247-248, 1988.

(MAR. 1988)

マツシタチャイロコガネの兵庫県下での分布

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 1 3)

高 橋 寿 郎

マツシタチャイロコガネ *Sericania matsusitai* Sawada は澤田玄正博士により松下伝吾氏が岐阜公園の朽木より採集された1対の標本により新種記載をされた (Jour. Agr. Sci. Tokyo Nodai, Vol. 2, No. 4, p. 569-571, 580, 582. pl. XL, f. 15, 16. pl. XL1, f. 7, 8, 15, 1955) 種である。

この記載で澤田博士は博士自身が *S. alternata* Sawada ヒラタチャイロコガネを記載された際の (Nippon-no-Kochu, Vol. 2, No. 1, P. 12, 19-20, pl. 2, f. 1. pl. 3, f. 5, 6. pl. 4, f. 3. 1938) 1♀, Minogo, near Onomichi. 1♀, Totoromi Osaka の2♀が共にこのマツシタチャイロコガネの♀であるとされている。

その後野村 鎮氏はこの *Sericania* 属の日本産のとりまとめ論文の中で (Tōhō Gakuho, No. 26, P. 178, 1976) 本種に言及新に産地に Wakayama : Kanaya, Arida, Chohoji を加えておられる。

図説は野村 鎮氏の“原色昆虫大図鑑Ⅱ(甲虫篇)” (pl. 63, f. 9, P. 125, 1963) と小林祐和

氏の“原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）”（pl. 70, f. 21, P. 394, 1985）がある。前者には分布を本州（岐阜・大阪・尾道）と後者には本州とのみある。

最近発表になった石田正明・藤岡昌介氏による“日本産コガネムシ主科目録”（LAMELLICORNIA 別冊, P. 33, 1988）では本州（長野以西）となっている。比較的広く産する種ではないかと考えるのだが具体的な産地を文献によって拾って見たわけでないのでどの地方に多くいる種なのかよくわからなかった。

兵庫県からは従来本種は記録されていなかったように考えられるが県内でも広く産する様に思われるし特に神戸市内では初夏の候注意すれば割合と産する様に思われる。

兵庫県下でわかっている産地は次の通りである（一部を除いて標本は全部筆者所有保管）。

神戸市鳥原（1♀, 25-V-1978, 1♀, 22-V-1981, 1♀, 3-V-1983, 1♂, 4-V-1983, 1♂, 10-V-1983, 1♀, 11-V-1985）。藍那（1♀, 5-VI-1978, 1♀, 20-V-1979）。丹生山（2♂♂, 1♀, 18-V-1958）。太山寺〔2♀♀, 20-IV-1982, M. Tanaka leg. in his coll.〕, 伊川谷前開（3♂♂, 13-V-1988, 4♂♂, 8♀♀, 19-V-1988）。

美濃郡吉川町奥山（1♂, 17-V-1986）。

多可郡鳥羽（1♂, 1-VI-1975, 1♀, 8-V-1976）。

相生市三濃山（5♀♀, 7-V-1972, 4♀♀, 3-V-1974, 4♀♀, 18-V-1974, 2♀♀, 1-V-1974）。

氷上郡柏原（1♀, 17-VIII-1958, 1♀, VIII-1960, T. Takahashi leg.）。

一応県の中央部から南側には分布している種のようにであり前に一寸ふれたように伊川谷前開では藤の花を網ですくうと入って来た。藤の花を食害しているとは考えられないのだが藤の花に來ているようには思われた。この様に個体数もそれ程採集し難いこともないのでもう少し県下の北の方にも分布している様な気がする。その採集時期がほとんど4月終りから6月初めにかけてで特に5月に多く見られるようであるが氷上郡下の様に8月での採集と云うのもあり注目してもよいと考えられる。

いづれにしても比較的渋味なコガネムシであるから余り注意されていなかった様な気がしないでもなく案外とずっと県下全域に分布している種なのかもしれない。

今回の同定については♂交尾器によったが原色図説もあり外見からもそれ程難しくないと考える。

ヒラタチャイロコガネに良く似ているがマツシタチャイロコガネの♂觸角片状部は4節で第6節は第7節の2/3位の長さであるがヒラタチャイロコガネは5節と云った大きな違いがある。上翅の間室は多少交互に高低があることは特色の一つであるがヒラタチャイロコガネも同じ様な上翅である。このヒラタチャイロコガネの方も兵庫県下からは全く記録がなかったが宍粟郡音水で採集した1♂

(11-VI-1972)を現在手許に保管している。こちらの方は可成り少ない種の様で野村氏は奈良・三重県を記録しておられ(1976), 石田・藤岡氏によると分布は本州(近畿)となっている(1988)。

(JUNE・1988)

兵庫県産テントウムシ数題

(兵庫県甲虫相資料・214)

高橋 寿郎

筆者はかつて兵庫県産のテントウムシをまとめさせて頂いたことがある(兵庫生物 Vol. 3, No. 4: 258-264, 1958. Vol. 4, No. 2: 96, 108, 1961)。その時点で兵庫県下から38種のテントウムシを記録した。兵庫県産と云っても神戸市が中心の調査で大変不十分なまとめであった。その後出来るだけ県下の調査を続けて来て現時点では68種のテントウムシが県下に分布していることがわかっている。一方日本産のテントウムシのほうも研究が進展して1963年には中根猛彦博士の“原色日本昆虫大図鑑 II, 甲虫”が出版され、1971年には佐々治寛之博士の大著“Fauna Japonica, Coccinellidae”が次いで1985年に同博士によって“原色日本甲虫図鑑(III)”と出版これらにより日本のテントウムシの同定も可成り小形種を除いてはしやすくなってきた。

兵庫県のテントウムシもまだ調査不十分な点を多く残しており少なくとも70種以上のテントウムシを産するのであろうと考えてはいるがここらあたりで再度県下のテントウムシ相をまとめておいたほうがいいのではと思っているが何分にも長文になるので発表の機会が得られず困っている。そこで今回は2, 3の県下産テントウムシの種に就いて報文をまとめて見た。

○ ズグロツヤテントウの県下の産地

ズグロツヤテントウ *Serangium punctum* Miyake は宮武睦夫氏が1963年に愛媛県産1♀と兵庫県扇ノ産1♀によって新種として記載された種である(Trans. Shikoku Ent. Soc. Vol. 18, No. 1, P. 13-14)。兵庫県産のものは Paratype で辻 啓介氏が1961年6月11日に扇ノ山で

採集されたもので大阪の芝田太一氏の所に保管されている標本となっている。その後佐々治寛之博士は上記種に続いて新種記載された北海道産 *Serangium ezoense* Miyatake が *S. punctum* のシノニムであるとされると同時に新しく和名ズグロツヤテントウの名を与えられ原色で図説♂交尾器の図をつけて発表された (*Fauna Japonica*, P. 57-59, pl. II-2 ; Fig. 14D-F, 1971) (原記載には全く図が無い)。そして分布は北海道, 本州, 四国となっている。1985年に佐々治博士は再び原色で図説されたが分布に九州が加わっている (原色日本甲虫図鑑Ⅲ, pl. 40, f. 4, P. 246)。小さい種で (体長1.8—2.2mm) 佐々治博士によると “山地性でやや少ない” となっている。

兵庫県下での記録は前記扇ノ山以外全く知られていないが筆者の手許には筆者自身が音水渓谷で採集した (15-VII-1973) *lex.* がある (この標本は原記載者宮武睦夫氏に同定していただいたものでありここに同氏に対し厚く御礼申しあげさせて頂く)。一応県下では珍しい種と思われるので記録しておく。

○ ヨツモンヒメテントウ兵庫県に産す

ヨツモンヒメテントウ *Nephus yotsumon* (H. Kamiya, 1961) は佐々治寛之博士 (旧姓神谷寛之) が山梨県甲府市と大月市産標本で新種として *Scymnus* (*Nephus*) *yotsumon* として記載された種である (*J. Fac. Agr. Kyushu Univ.* Vol. 11, No. 3: 287-288, pl. 38-F; Fig1-G, Fig: 2-F, Fig. 3-B, 1961)。その後同博士は原著 *Fauna Japonica: Coccinellidae* に原色で図説された (P. 125-126, pl. IV-15; Fig: 47) (学名は上記の様に *Nephus* 属の種として取扱う)。その後1985年の原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ) にも原色で図説された。分布は本州, 九州で少ないが樹皮下で越冬中のものがしばしば採集されるとある。小さい種ではあるが上翅上の前後に並んだ2つの小赤紋で割合同定し易いと考えられるが従来から県下の記録はなかった様に思われる。今回加東郡社町三草で叩網によって *lex.* 採集することが出来たので (1987年6月26日) 兵庫県初記録の種として報告させて頂く。

○ ウスキホシテントウとジュウロクホシテントウについて

戦前1940年に平山修次郎著原色甲虫図譜にウスキホシテントウ *Synharmonia hirayamai* Yuasa (pl. 52, f. 23, P. 170) とジュウロクホシテントウ *Neomysia nipponica* Yuasa (pl. 52, f. 38, P. 172) が原色で図説された。そしてその序文の所でこの2種はいずれ湯浅啓温博士によって新種として発表される筈のものであると書かれている。図示されたのは前者は長野県浅間山産のものであり (1939-VII-15), 後者は東京井ノ頭産 (1938-VI-13) のものであった。このうち後者の種は筆者も戦前神戸市で採集していた。とこ

ろがこの新種記載はその後長い間発表にならなかったが1963年にやっと記載として発表された (Frag. Col. pars. 3 : 12)。同じ年中根猛彦博士は原色で図説をしておられる (原色日本昆虫大図鑑Ⅱ甲虫。後者の和名はジュウロクホシテントウとされている)。1971年に佐々治寛博士の大著 "Fauna Japonica : Coccinellidae" が発表になりその中で共に図説された (前者 p.259, pl. XⅢ-11. 後者 p.273-274, pl. XⅣ-15. 後者の和名はシロジュウクホシテントウとなっている)。

1982年に S. M. Iablokoff-Khuzorian は "Les Coccinelles, Coleopteres-Coccinellidae. Tribu Coccinellini des regions Paléarctique et Orientale" なる568p. からなる大著を発表になっておられる (この本の紹介は佐々治博士のものがある。甲虫ニュース, No. 60 : 8, 1982)。

その中で前者の *Synharmonia* の属は *Oenopia* Mulsan, 1950 属のシノニムとされ (p. 398), この種は *Oenopia hirayamai* (Yuasa) とされている (p. 425~426)。そして後者は *Sospita* (*Myzia*) *oblongoguttata* (Linné) の亜種 *nipponica* (Yuasa) とされている (p. 159-160, fig. 226) (基亜種は中国, シベリア, ヨーロッパ, 北アメリカに広く分布していると)。そして佐々治博士の1985年の原色日本甲虫図鑑Ⅲ (pl. 43, f. 8, 16, p. 263-264) にその学名が用いられている (和名は後者にジュウロクホシテントウが使われている)。

共に日本ではそれ程珍しい種ではないようであるが兵庫県下では案外と記録が無い。どうも調査が足りないテントウムシのようでありもっと広くいる様に思うのだが——。

—応現時点での採集・記録をのべると次の通りである。

ウスキホシテントウ *Oenopia hirayamai* (Yuasa, 1963)

産地：川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。神戸市六甲山 [lex., 18-V-1941, T. Taniguchi leg., H. Sasaji, 1971], 山の街 (lex., 7-VI-1959) 逢山峽 (lex., 28-VII-1987)。美濃郡吉川町奥山 (2exs., 10-VI-1986)。出石郡出石町中村 [高橋, 1963], 城崎郡三川山 [高橋, 1975]。

尚本種と同じ属 (従来 *Protocaria* 属) のムツキホシテントウ *Oenopia scalaris* (Timberlake, 1943) の県下からの記録はこれまで全く無かったが筆者は次の産地のものを所有している。

西宮市香櫨園 (lex., 2-V-1941)。神戸市山の街 (lex., 15-VIII-1949)。

ジュウロクホシテントウ *Sospita oblongoguttata nipponica* (Yuasa, 1963)。

産地：川西市大和 [仲田, 1970, 1978, 1982], 能勢口 (lex., 5-X I 1977)。神戸市六甲山 (lex., 23-VI-1962, lex., 4-VI-1987), 再度山 (lex., 19-V III 1939)。氷上郡山南町 [高橋, 1961]。

(DEC. 1987)

兵庫県産カミキリムシ 2 題

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 1 5)

高 橋 寿 郎

○ シロスジドウボンカミキリの産地

シロスジドウボンカミキリ *Pothyne annulata* Breuning は“日本産カミキリ大図鑑”によると本州の福井県以西に分布している種でどちらかと云えば南方系の種のようなものである。寄主植物にウメ、スモモ、ハマヒサカキ、ヤブガラシ、キブシなどがあげられている。

兵庫県下での記録は洲本市三熊山 [金田, 1980], 西宮市生瀬 [遊磨, 1974], 美方郡浜坂町城山 [磯野, 1981] と知っているだけである (他に記録があれば御教示頂きたい)。

筆者自身は相生市三湊山で lex. (1-VI-1974) 採集しているが1987年6月27日神戸市逢山峡で叩網で lex. 採集出来ているので此処に記録していきたい。

○ タイワンメダカカミキリの県下での産地

タイワンメダカカミキリ *Stenohomalus taiwanus taiwanus* Matsushita は松下眞幸博士が台湾産標本で記載されたが故にこの種名がついている (J. Fac. Agric. Hohhaido Imp. Univ., 34(2):307, pl. 1, fig. 13, 1933) が日本の琉球列島は勿論四国, 九州, 本州と広く分布しているようで (カミキリ大図鑑によると台湾産は別亜種とある), 特に珍しいものではないかもしれないが (カミキリニュース関西版 Vol. 19, Nol, 1987 によると大阪府豊能町寺田で栽培されているサンショの材から多数出て来たことが報じられていた), 兵庫県下の記録は筆者の知っている範囲では多紀郡丹南町竜造寺 [辻, 1964], 養父郡氷ノ山 [遊磨, 1972], 横行 [黒田, 1982] と神戸市六甲山 [関, 1941] で案外少なかったがごく最近前平照雄氏が自宅の裏に植えていたサンショが枯れて切り倒したのから本種を 39 exs. も採集した記録があり (場所は豊岡市下陰. IRATSUME, No. 12, P. 89, 1988) 結構多くいる種と云うことがわかった。

筆者自身は神戸市内の山の街で lex. (17-V-1953) 採集しているが此の地は住宅地に変っているので現在どんな状況なのか——。

1987年6月27日同じく市内逢山峡で叩網で lex. 採集出来ているので此処に記録しておきたい。

神戸市内でもたくさんいる所がある様に思われる。

(MAY 1988)

宝塚大橋の昆虫（その2）

新 家 勝

今回は、シテムシ科からコガネムシ科までについて報告する。

7. Silphidae シテムシ科

- (1) *Necrodes asiaticus* Portevin オオモモフトシテムシ

X. 25, 1978 武庫川町

X I. 6, 1978 南口2丁目

1978年から1979年にかけて、次種とともに普通に見られたが、最近は余り見られなくなってしまった。

- (2) *Necrodes nigricornis* Harold モモフトシテムシ

X. 25, 1978 南口2丁目

X. 26, 1978

8. Staphylinidae ハネカクシ科

- (1) *Staphylinus maxillosus* Linne オオハネカクシ

VI. 12, 1979 武庫川町

9. Lucanidae クワガタムシ科

- (1) *Prosopocoilus inclinatus* Motschulsky ノコギリクワガタ

VI. 10, 1979 南口2丁目

- (2) *Dorcus titanus* Boisduval ヒラタクワガタ

X II. 14, 1986 南口2丁目

- (3) *Macrodercus rectus* Motschulsky コクワガタ

VII. 27, 1980 南口2丁目

VII. 26, 1986 南口2丁目

(4) *Macrodorcus binervis* Motschulsky スジクワガタ

Ⅶ. 9, 1981 南口2丁目

Ⅶ. 9, 1987 武庫川町

(5) *Figulus binodulus* Waterhouse チビクワガタ

V. 29, 1979 武庫川町

本種は、毎年かなり多く見られる。コクワガタとスジクワガタは、毎年1~2頭程度見られるが、ノコギリクワガタ、ヒラタクワガタは、余り見られない。

10. Scarabaeidae コガネムシ科

(1) *Maladera orientalis* Motschulsky ヒメビロウドコガネ

Ⅷ. 27, 1987 南口2丁目

(2) *Maladera castanea* Arrow アカビロウドコガネ

. 10, 1984 武庫川町

(3) *Maladera secreta* Brenske マルガタビロウドコガネ

Ⅵ. 10, 1979 南口2丁目

(4) *NipponocERICA pabiventris* Nomura ハラゲビロウドコガネ

X. 24, 1979 武庫川町

兵庫県を原産地とする鯉角類の一種 (SAIKAKU 4 1987 参照)。

(5) *Lachnosterna kiotoensis* Brenske クロコガネ

Ⅶ. 19, 1986 武庫川町

(6) *Lachnosterna picea* Waterhouse コクロコガネ

V. 30, 1984 武庫川町

(7) *Lachnosterna morosa* Waterhouse オオクロコガネ

Ⅶ. 18, 1979 南口2丁目

(8) *Heptophylla picea* Motschulsky ナガチャコガネ

Ⅵ. 25, 1984 南口2丁目

(9) *Melolontha frater* Arrow オオコフキコガネ

Ⅵ. 10, 1979 南口2丁目

(10) *Melolontha japonica* Burmeister コフキコガネ

Ⅵ. 24, 1981 武庫川町

前種とともに非常に多い。

(11) *Eophileurus chinensis* Faldermann コカブトムシ

- V. 9, 1982 武庫川町
- (12) *Adoretus tenuimaculatus* Waterhouse コイチャコガネ
VI. 10, 1981 南口2丁目
- (13) *Mimela splendens* Gyllenhal コガネムシ
VI. 19, 1981 武庫川町
- (14) *Anomala testaceipes* Motschulsky スジコガネ
VII. 11, 1979 南口2丁目
- (15) *Anomala albopilosa* Hope アオドウガネ
VII. 5, 1979 武庫川町
5月から10月に至るまで、長時間にわたって多数、見られる。
- (16) *Anomala cuprea* Hope ドウガネブイブイ
V. 31, 1979 南口2丁目
- (17) *Anomala rufocuprea* Motschulsky ヒメコガネ
VII. 10, 1981 武庫川町
- (18) *Anomala multstiriata* Motschulsky ハンノヒメコガネ
VI. 17, 1982 南口2丁目
- (19) *Anomala daimiana* Harold サクラコガネ
VI. 21, 1979 武庫川町
VI. 15, 1983 武庫川町
- (20) *Blitopertha orientalis* Waterhouse セマダラコガネ
VI. 16, 1979 武庫川町
- (21) *Rhomborrhina japonica* Hope カナブン
VII. 8, 1985 武庫川町
- (22) *Protaetia orientalis* Gory et Percheron シロテンハナムグリ
VII. 26, 1986 南口2丁目

(未完)

宝塚安倉上池のトンボ（続報その1）

新 家 勝

宝塚市安倉上池のトンボについては、第15巻第2号で報告したが、その後も、この池を訪れているうちに、更に数種のトンボを採集又は目撃したので報告させていただく。

(1) *Ischunura senegalensis* Rambur アオモンイトトンボ

IX. 12. 1987 1♂, 1♀採集

東西の池を分ける農道の中程、魚釣の子供達が多いので、いつも足早に通り返る小さな草むらに、一見セスジイトトンボのようだが、動作の鈍いイトトンボがいる。よく見ると付近のマコモにも同じものがおり、♀がセスジイトトンボとは全く違う。採集して確かめたところ、アオモンイトトンボであったが、驚いたことに、VI. 14, 1986にセスジイトトンボだと思って撮影したスライドの中に本種が混じていた。そして、IX. 13, IX. 15, IX. 20, IX. 27, X. 3, X. 4にそれぞれ同じ場所で目撃できた。♀は♂との異色型が圧倒的に多く、♂・♀とも特定の草むらから余り移動しないようである。なお、1988年にも、VI. 5, VI. 11, VIII. 7, VIII. 11, VIII. 15, に目撃している。

(2) *Ceylonolestes gracilis peregrinus* Ris ホソミオツネトンボ

V. 2. 1987目撃

安産の祈とうで有名な中山観音の池で沢山のホソミオツネトンボを見た帰りに、安倉上池でも1頭を目撃した。ここでは、1回のみ目撃であり、発生しているとは思えない。たまたま飛来したのではないかと思う。

(3) *Trigomphus citimus tabei* Asahina タベサナエ

V. 10. 1987 目撃

愛宕山神社の参道で三脚を据えていたところ、向こうから風に乗ってサナエがやって来る。“何サナエかな”と思ったとたん、左手にとまってしまった。これも、たまたま通り合わせたものだろう。

(4) *Sieboldius albardae* Selys コオニヤンマ

VI. 28. 1987 1♀採集（死体拾得）

VII. 2. 1988 1♀目撃（産卵中）

前者は、釣人が操る釣竿先端近くの水面に浮いているのを拾い上げたもので、胸部が破裂し

て死んでいた。釣人のいわく“そんなもん死んでまっせ”“ふーん、この人が釣竿で叩き落したな”と直感した。トンボがフナ釣りの邪魔をするのだと言うことは、以前からこの池の釣人たちから聞いていた。イトトンボのような小さなものでも、浮きの先端に止まると、フナの微妙な“引き”を見るうえで障害になるのだという。トンボが竿の近くに来るだけで、かんしゃくを起こす人がいるのだろう。たまたま、この池にやって来て、ひどい災難に会ったものだと思ひ、きれいに修復して標本にした。

後者は、岸の近く、ガガブタが広がる水面で打水産卵していたもの。オオヤマトンボにしては、飛び方が緩慢なので、よく観察したところコオニヤンマであった。

たまたま飛来するのだろうと思っていたのだが、この池でも発生するらしい。ちなみに、近畿のトンボ（関西トンボ談話会）によれば「幼虫は低地や丘陵地を流れる河川の上・中流域及び大湖の砂礫・泥底に生息する」とあり、この池で発生しても不自然ではない。

(5) *Epitheca marginata* Selys トラフトンボ

V. 23. 1987 目撃

市内では、西谷方面の池で普通に見られる。また、VI. 9. 1984 御殿山一丁目での記録があるが、平地ではほとんど見かけない。

(6) *Somatochlora uchidai* Foerster トラフトンボ

VII. 5. 1987 捕獲（種の確認のみ）

愛宕山神社の林間を摂食飛翔していたもの。灯笼の台石に上り、ネットを持って飛びついて捕獲した。

(7) *Orthetrum triangulare melania* Selys オオシオカラトンボ

VII. 25. 1987 目撃

VII. 10. 1988 目撃

いずれも愛宕山神社の森にいたもの。川面から中山にかけては普通に見られる。

(8) *Sympetrum infuscatum* Selys ノシメトンボ

IX. 27. 1987 目撃

X. 17. 1982に安倉中二丁目の安倉中池での目撃例がある。西谷方面では、かなり見られるが、平地では余り見かけない。

第15巻第2号で17種、今回8種、計25種のトンボについて報告したが、まだアキアカネ、クロスジギンヤンマ又はその雑種、オオキトンボなど、いる可能性のあるものを含めると、約30種になり、宝塚市内のトンボ60余種の半分近くになる。もっとも、この池で発生したものばかりではなく、たまたま通り合わせたものを含めてのことである。このうち、アキアカネは必ず見付かるだろう。クロスジ

ギンヤンマは、それらしきものをⅦ. 27. 1987に一度だけ目撃しているが、中山寺付近での発生時期から、かなり離れているいえ、捕獲していないので、スジボソギンヤンマか又はタイリククロスジギンヤンマか区別がつかない。オオキトンボは、近くの昆陽池にかなりいたとのことであり、この池でも可能性はありそうである。

1987年、1988年とも池を取り巻く環境は変わらない、相変らず多いセスジイトトンボ、アオヤンマ、コシアキトンボ、コフキトンボそれにチョウトンボ、勇壮にパトロールするオオヤマトンボ、棒杭の上に水平に止まるウチワヤンマなど、いつも目を楽しませてくれる。このトンボの楽園は、当分、安泰であろう。

アオドウガネの食草についての報告（続報その3）

新 家 勝

Ⅶ. 21. 1988 西宮市田近野町、旧武庫川堤防内のアメリカフヨウの蕾及びヘクソカズラの葉を食害していた。

Ⅷ. 11. 1988 宝塚市安倉北四丁目、愛宕山神社内のヤマノイモの葉を食害していた。

Ⅷ. 15. 1988 同上の場所でヤブカラシの葉を食害していた。

ヒメタイコウチの一記録について

西 隆 広

ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* Esaki は国内においては兵庫県および愛知県に局地的に分布することが知られており、兵庫県では西宮市、三田市、明石市に記録があり、明石市大久保が現在まで国内分布の西限とされているが経度ではほぼ同じである小野市内において本種を記録したので報告する。

- ① 4 exs., (幼虫) 27. VI. 1987 小野市青野ヶ原
- ② 1 ex., (成虫) 15. VIII. 1987 小野市青野ヶ原

なお、両日ともに同行され、伴に採集されかつ報告を一任された小林桂助、張英彦両氏に深甚の謝意を表します。

(参考文献)

- 1). 高橋寿郎(1987). 県下の水生昆虫、鳥と自然：9-16

芦屋市内でクロイワツクツクの声聞く

西 隆 広

クロイワツクツク *Meimuna opalifera* WALKER は九州の佐多岬付近を北限とし、南西諸島に広く分布するツクツクボウシ属の蟬の一種である。

本種の声が芦屋市内において聞いたので報告する。

- 13. X. 1985 (9:40AM頃) 芦屋市芦屋川業平橋南

本種は芦屋川畔のクロマツの樹上で鳴いていたが姿は確認できなかった。本種の声は私は初めて聞くものであったが特異な鳴き方で、その特徴をメモし、文献等¹⁾²⁾により判断した。声の質はハルゼミに似ており、最初遠方で聞きつけたときは、一瞬時期はずれのハルゼミの発生かと疑った程である。

この件について芦屋市教育研究所指導主事の古市景一氏は芦屋市立山手中学校に在職当時、生徒の一人が秋にハルゼミの声を聞いたと報告して来たことがあったが、発生期にはハルゼミの声がよく聞かれる同校の生徒が本種の声聞いた事も考えられると指摘された。

1975年10月下旬、本種が北限を超えた熊本県阿蘇郡で大発生したことがある³⁾。これは徳之島から同地へ移植されたヤマモモ等の根に入っていた幼虫が羽化したものとされているが、造園ブームの昨今、各地で起り得ることと考え、声だけの記録ではあるが、報告するものである。

(参考文献)

- 1) 岩田久二雄ほか(1959). 日本昆虫記Ⅵ: 講談社
- 2) 橋本治二(1975). セミの生態と観察: ニューサイエンス社
- 3) 大塚 融(1977). 熊本県のセミ. 昆虫と自然12(8):23-24.

オオシロカミキリの芦屋市における記録

西 隆 広

芦屋市においてオオシロカミキリ *Olenecamptus cretaceus* BATES を採集したので報告する。

- ① 1♂, 22. VIII. 1980 芦屋市川西町
- ② 1♂, 18. VII. 1987 芦屋市山芦屋町

①は自宅の燈火に飛来したもの、また②は路傍のヌスビトハギの葉の裏に静止していたものである。

サツマゴキブリのオガ屑内発見例

森田真澄

サツマゴキブリ *Opisthoplatia orientalis* FABRICIUS の分布地域は足摺岬・九州南半部から琉球列島各地・華南・台湾とされている¹⁾。筆者は1988年5月20日、神崎郡神崎町福本で広葉樹オガ屑内より1頭発見しているので報告する。

その発見場所であるオガ屑はエノキタケの人工培地素材の一つとして熟成させるために日光や風雨に晒し野積みされていた。純粋なオガ屑（神崎町あたりの方言で‘ヒッコ’と呼ばれている。挽き粉の転訛であろう。）ではなくチップダストや葉・枝が多く混在していた。幅広の翅の退化した特異な形態のゴキブリであり、指で体を挟むと腹をうねうねと動かす動作をした。

このゴキブリの発見地点が従来の分布地からかなり飛び離れたところであることの原因を推測してみると、キノコ用のオガ屑の購入先として県内のチップ工場が数社あると、キノコ生産管理者の談話にあった、またキノコ生産用のオガ屑は直接県外²⁾場合によっては国外より購入するとも聞く、となるとオガ屑を媒体としてのサツマゴキブリのみならず樹皮や葉や枝を生活環境の一つとする生物一般の人為的移動網が存在することになる。人為的分布拡大の要因の一つとして等閑視できないものであろう。さらにオガ屑の堆積物は冬期においても発酵熱のため湿気が立つ程に高温であるので南方系のサツマゴキブリでも越冬出来てしまう可能性がある。

ごきぶりや妻の怒りははげしきもの 森川暁水

この句のようなゴキブリに対する嫌悪を通り越して条件反射的な憎悪にまで達した感情は普通の日本人（少なくとも現代の）なら一般的なことでありましょう。人間様のご都合によって害虫に分類された昆虫も多々あるがゴキブリはその最右翼でありましょう。その嫌われ者達が近年少なくとも拙宅では明らかに減少して来ている。（高砂市）イエバエは今年（1988年）の春夏とまったく瞥見しなかったし、それを食するハエトリグモも最近見ていない。クロゴキブリは今年8月20日に1頭見たきりである。ただし、そのことを不思議に思って北播在住の人数名に話したら、いくらでもいるよと笑われてしまった。農村部と市街地では差があるのだろうか。

サツマゴキブリは住家性のゴキブリではなさそうなので本州に進出して行っても一般人の目に触れることはほとんどないだろうが、それにしてもクロゴキブリやチャバネゴキブリにも増して近代日本人に嫌われそうな形態ではある。

(参考文献)

- 1) 日浦勇(1977). 原色日本昆虫図鑑下巻、保育社.
- 2) 小亀宏(1988). きのか用オガ屑流通の現状と問題点、特産情報10(1): 46-47.

カラスザンショウに吸蜜に訪れた蝶について

蜂谷幸雄

筆者は、今年8月1日 午前6時30分から午前9時の間、須磨浦公園を訪れ、カラスザンショウ [Fagara ailanthoides ENGL.] の花に訪れるモンキアゲハの採集を行なった際、同様にカラスザンショウの花に吸蜜に訪れた数種の蝶を目撃し採集した、その中には普通、訪花を目撃しにくい種も含まれていたの以下に種名を列挙し報告する。

ナミアゲハ	<i>Papilio xuthas xuthas</i> LINNAEUS;	1♂
モンキアゲハ	<i>Papilio helenus nicconicolens</i> BUTLER;	7♂, 5♀
クロアゲハ	<i>Papilio protenor demetrius</i> FRUHSTORFER;	1♀
アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon nipponum</i> FRUHSTORFER;	1♂
コムラサキ	<i>Apatura ilia substituta</i> BUTLER;	1♂
ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica japonica</i> C. & R. FELDER;	5♂, 1♀
ジャノメチョウ	<i>Minois dryas bipunctatus</i> MOTSCHULSKY;	2♀

(SEP.1988)

イネネクイハムシ小野市山田町で採集

(兵 庫 県 甲 虫 相 資 料 ・ 2 1 6)

高 橋 寿 郎

イネネクイハムシ *Donacia* (*Cyphogaster*)*provosti* Fairmaire, 1885 は Peking 産で記載された種である (Ann. Soc. Ent. France (6)V, Bull. Séance pp. LXIV-LXV, 1885)。

日本から本種が初めて正式に記録されたのは1934年の中條道夫博士の論文においてであると考えられる (Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, 24: 528)。その中で中條博士は従来日本では *Donacia aeraria* 或は *D. lenzi* の両種と混同されてきていることを指摘されている。

筆者自身は見る機会を得ていないが中條博士と同じ年(1934)に Goecke 氏が *Donacia* (*Cyphogaster*) *Provosti* として Japan proper: Tokio, Kioto & Hiogo を産地に日本を分布にふくんだ記録を発表しておられる (Kol. Rundschau, xx. 6, pp.217 & 218-221, 5 photo)。

中條博士の発表になられた論文の中では 1 sp. Hiogo (Honshu) 7, VI, 1881 (Col. G. Lewis) の記録がふくまれている。

この種とネクイハムシ *D. lenzi* との区別はそれ程難しくないようなのだが (觸角第3節が明らかに第2節より長く約 1.5倍あり、体色も可成り明るくはっきりした色彩をしている様である)。

文献によると本種の方がネクイハムシより低地に広く分布しているようなのである。共に分布の広い種である。

ところが兵庫県下ではネクイハムシの方は分布も広いし、個体数が大変多いのかかわらずイネネクイハムシの方は記録もそれ程無く (美方郡下では割合いる様である)。筆者自身も県下から未採集であった。恐らく調査不十分の結果なのか今一つ県下での分布が良くわからない種であった。

1987年小野市山田町で調査の機会があり (5月2回、6月2回の調査) たまたま池もそこそこあるので注意して見たのであるが時期が悪かったのか採集出来なかった。7月8日にも調査に出掛け1ヶ所の池でネクイハムシが割合見られた (5♂, 4♀採集)。その池でネクイハムシに混じってイネネクイハムシ1♂を採集することが出来た。もっというのではと注意したが他には得られなかった。7月23日も再度調査に出掛けて探して見たがこの時は両種共見られなかった。

僅か1♂の採集しか出来なかったが恐らくこのあたりには間違いなくいる様に思われる。今の所野ヶ原からの記録は無い様に思うが多分ここにもいるのではないだろうかと考えている。一応今後の

調査をまつこととしてとりあえず小野市での産の記録報告をしておく（9月17日も調査したがネクイハムシ1♂を得たのみであった。場所は山田町の池であった）。

(MAY 1988)

神戸市内のムネアカセンチコガネ

(兵庫県甲虫相資料・217)

高橋寿郎

1988年7月25日六甲山上の道路上から（凌雲台付近）（多分電燈に飛来したのではないかと）蜂谷幸雄氏が本種即ちムネアカセンチコガネ *Bolbocerosoma nigroplagiatum* (Waterhouse) の1♀を採集され御恵与下さった。戦前六甲山に本種は多くいるとの記録もあつたりしたのであるが戦後全く採集記録が見られなかった種でありまだ元気で棲息していることが確かめられて大変喜んでいる。

そこで神戸市における本種の今迄の記録を一度眺めて見ることにした。

本種は C. O. Waterhouse により日本（長崎）、朝鮮を産地に1875年 *Bolboceras nigroplagiatum* として記載されたのである。（Trans. ent. Soc. London Part. 1, 1875, p.96-97）（標本は♀で♂は無かったようである）

1895年に G. Lewis は東京、横浜、神戸。普通ならずとして記録された（Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 6, Vol. X VI, p.385,1895）。

これが本種を神戸から記録した一番古いものになる（残念ながらデータが無い）。

1933年の関 公一氏による“御影町附近産の甲虫目録”（昆虫界 Vol. 1, No. 3, p.251-253）の中には出てこないが1934年の“大阪・神戸附近の金亀子虫”（昆虫界 Vol. 2, No. 9, p.308-313）の中では“御影町に在る後井芳介氏邸の電燈に飛来せり、稀なり”と記録された。これが邦人による神戸市からの初めての記録になるかと思う。

1935年竹中眞一氏は須磨鉢伏山麓明石郡垂水町下畑（現垂水区下畑町）で燈火に飛来した2♂（8-VIII-1931,17-VIII-1933）の記録を発表された（昆虫界 Vol. 13, No. 13, p.99）。

同じく1935年矢野文彦氏は六甲山上で3♂3♀を採集したと記録（内1♂♀は燈火に飛来したもの、

他のものは地に穴を掘りつつあったとのこと)。コンクリート上で自動車のため踏みつぶされているのがかなりあったとも記してある。詳しいデータが無くただ夏と言うだけでいささか不親切な報告でもある(昆虫界 Vol. 3, No.17, p.329)。

1941年増田 猛・橋本直也氏は摩耶山から(一中附近の昆虫, p.32) “燈火に飛来せるを得るのみ未だ糞中で得ず”と記している。これもデータがついていない今一つ不親切である。

以上が筆者が知る本種の神戸市での記録の総てであり、いずれも戦前のものばかりである。戦後本種の神戸市からの記録と言うものは筆者残念ながら見たことがない。或は見落としているかも知れないのであれば御教示頂ければ幸である。

戦後の本種の記録は未発表であったが筆者の手許に次の標本がある。即ち燈灯に飛来したと御影町の吉阪道雄氏が採集御患与下さった1♂(29-X-1956)(この標本は鳥と自然, No.38, 1985に図説した)。筆者自身が教育植物園の地上を歩いていたのを採集した1♂(9-VII-1961)があるがいずれも可成り古いものである。今回の蜂谷氏の採集は久し振りのものである。

ただ兵庫県下での記録と言うと。

川西市雲雀ヶ丘[後藤, 1955]。三田市志手原[三木, 1977]。氷上郡黒井, 市島[山本, 1958]。出石郡但東町口藤[高橋, 1962]。城崎郡日高町神鍋[高橋, 1976]。美方郡村岡町大笹(鉢北高原)[谷角, 1987]等があり谷角氏のもは新しいがその他の記録は割合と古い。

本種の生態については和田 薫氏の報文がある(昆虫学評論 Vol. 39, No. 1, p.95-100, 1984)。横浜市内での観察であるがこの種は古い乾燥した牛糞を幼虫の餌として利用しているということがのべられている。やはり牛糞があれば本種の棲息は考えられる。神戸市内、六甲山系での牛の飼育というものが可成り少なくなっているからこの虫との出会いも仲々大変だと考えている。

(AUG. 1988)

(付記)

脱稿後東京の岩瀬一男氏からムネアカセンチコガネの学名に関する分類学的文献を御教示下さると共にそのコピーを送って下さった。即ち1973年 G. V. Nikolayev がムネアカセンチコガネをタイプとして *Bolbocerodema* 属を創設された(Ent. Rev. Vol. 52, No. 4, p.548)。ところが1979年 J. Krikken はこの属を *Bolbocerosoma* 属の亜属として取扱っている(Zool. Med. Deel. 54, no. 3, p.35-43)(そしてムネアカセンチコガネの検視標本は日本各地産26♂35♀とありその中に Hiogo 産もふくまれている。ただしデータはついていない)。

日本にはこの属の種はこのムネアカセンチコガネ1種しか産しないがもっと近似のこの属の種を多く見なければこの属の取扱いが妥当かどうかはよくわからない。

上記文献を御教示並びに御送り下さった岩瀬氏に厚く御礼申しあげる。

ナガツツハムシ 2種の記録

(兵庫県甲虫相資料・218)

高橋寿郎

ヨツボシナガツツハムシ *Clytra arida* Weise について拙文を本誌前号に発表させて頂いたがその後東正雄先生から次の様な採集記録を御教示下さった (Mt. Rokko, Okuike alt. 400m 内外 1 ex., 13-VI-1954, M. Azuma leg.)

また芦屋の西隆広氏からも芦屋市内で採集しているむね連絡頂いた。

本年逢山峠へは所要があって行っていないので本年度は本種の採集は出来なかった。

御教示頂いた御両氏に厚く御礼申しあげる。

ところで同じ亜科に属するクロオビツツハムシ *Physosmaragdina nigrifrons* (Hope) は仲々はっきりした色彩をして美しいツツハムシであるがどうしたものか県下の記録が全くない。ただし筆者は次の通り採集している、相生市三濃山 (7 exs., 20-VII-1974), 飾磨郡夢前町我孫子 (1 ex., 1-VIII-1980) (きべりはむし Vol. 9, No. 1, 1981)。さらに本年竜野市神岡町のススキから 2 exs. 採集した (21-VII-1988)。いずれもススキからの採集で本種の食草がススキと言われているから当然であろうが播磨平野のやや西方域でのみで採集出来ていることと盛夏での採集ばかりである。このあたり調査の方法が悪いのではないかと考えたりしている。

(AUG. 1988)

県関係文献紹介

- 田中眞吾編著 六甲山の地理 B6. 297p.

前号で紹介したように1988年7月神戸新聞総合出版センターから阪神大水害50周年事業出版として発売された。執筆者は神戸大学田中眞吾博士を始め20名。昆虫については筆者が担当(p.129-134)。加藤昌宏氏の野鳥。仲谷淳氏のイノシシの話などが入っている。一般書店で販売(1,000円)。(本書は1988年7月25日全国学校図書館協議会選定図書に選ばれています)

- ひめじの昆虫 I

姫路市都市緑化課内 (社)ひめじ花と緑の協会発行 76p.

カラーで今回は主としてチョウ、トンボが紹介され観察地案内とか採集のしかたなどもある。発行年月日が良くわからないが1987年3月31日と最後にある。執筆者は相坂耕作・家永善文・木村三郎氏ほか7名。第Ⅱ集はセミ・甲虫を収録の予定とか。1973年出版された“自然への招待”(姫路青年会叢所社会開発委員会発行)とスタイルが良く似ている。仲々たのしい文献である。

- 西村 登著 ヒゲナガカワトビケラ

日本の昆虫9 四六判144p. (1987年8月刊)

(文一総合出版刊, ¥1,300)

西村博士による主として兵庫県円山川を中心に長年にわたり観察、研究をされたヒゲナガカワトビケラについての単行本で著者自身この虫に関しての世界で最もくわしい本だと述べられているように貴重な文献である。兵庫県に関する虫の文献と言うばかりでなく、一般に知られていない虫の秘密を解き明して貰える有難い書でもある。

- 西村 登著 夕ぐれの飛行

エムシ亭閑人雑文集

(ふだん記グループ刊、119p.)

(1988年4月刊)。

本書は昆虫関係の文献では無いとも言えるかもしれないが西村博士の“ヒゲナガカワトビケラ”に関する文もあるので昆虫関係の文献ともいえる。兵庫県PTA新聞などに寄稿された随想などをまとめられている。兎に角どれも軽妙洒脱楽に読める大変うれしい。やはり教育者の作品だと感心させられる。

以上2書は西村博士より御恵与を受けました。ここに御礼を申し上げさせていただきます。

さらに登日邦明氏から同氏主宰の“Awajiensis, 01”及び“Nature Kids, 02”の2冊を御送

り頂いている。前者は昆虫以外の淡路島の自然を記録、後者は一般向けの自然保護の啓蒙誌で直接昆虫に関するものではないが興味のある方は登日氏迄連絡して下さい（〒656-21, 津名郡大町畑235）

県内学会誌・同好会誌・連絡誌（1988・Ⅳ～1988・Ⅸ）

姫昆サロンニュース（姫路昆虫同好会連絡誌）

No.81（1988・Ⅳ）、No.82（1988・Ⅴ）

IRATSUME（但馬むしの会々誌）

No.12（1988・Ⅳ）

兵庫陸水生物（兵庫陸水生物研究会）

No.30,30（A）（1988・Ⅳ）

伊丹の自然（伊丹市立博物館）

第6号（1988・Ⅵ）

混虫ずかん（但馬むしの会連絡誌）

No.19（Ⅵ・1988）No.20（Ⅸ・1988）

PARNASSIUS（淡路昆虫研究会々誌）

No.34（Ⅸ・1988）

INSECT（淡路昆虫研究会連絡誌）

No.35（Ⅸ・1988）

会費納入についてお願い

1989年度会費 2,500円

出費多端の折、恐縮に存じますが、会費納入を年内に同封振替用紙御利用の上、お願い申し上げます。

編集後記

- 本年は割合と梅雨頃迄はしのぎ易い気候でした。梅雨に先駆け5月は意外と雨が多かったと思います。そして梅雨明け宣言の後で戻り梅雨という現象に面喰いました。7月中霽陶しい日々連続、8月に入っても解消されず、夏休み中晴れた日は7日と異常な天候でした。虫にも影響あったのではと思いますがどんなものでしたでしょうか。
- 先日神戸市内の高等学校で生物関係を教えておられる先生に伺ったのですが昔は生徒の方が先生山へ行こうと誘ってくれたものだが今は先生が生徒にむかって山へ行こうよと誘っても応じてくれるものは少なく、決行前日になると1人とか2人になってしまい面白くないからやめというようなことになっていると。とに角鴉が忙しくて大学受験科目だけの勉強しかしない。大変淋しいことだが之が現実ですよとのことでした。
- 既に新聞紙上に発表(8月28日)されまして県の自然博物館が昭和67年開館を目標にスタートいたしました(建設地決定は新聞発表前日県教育委員会の方から連絡を頂きました。尚当方へ9月1日付で自然系博物館の建設場所についてと言う地図と写真をそろえた文書も送られて来ています)。これからは何かと会員の皆様の御協力をお願いすることが出てくると思います。その節は宜しくお願い致します。
- 今号もどうやら発行することが出来ました。毎々申しあげておりますように原稿難・資金難で休会直前の状態です。なんとか20巻迄は続けたいと考えていますがどうなりますか。長・短にかかわ

りませず御投稿下さい。とに角17巻は発行する決意しております。会費納入の方も宜しくお願い致します。

(T)

きべりはむし 第16巻第2号

昭和163年11月25日発行

発行：兵庫県昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎方

振替 神戸7-26646

印刷：(株) 文 尚 堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
